

昆明の豊かやじり貧しやじり

12月24日(金)

昆明市街のほぼ中央、雲南省政府ビル正面から南へ伸びる正義路(シャンイーロ)と昆明を東西に走る東風路(ドンフェンロ)が交わる一帯が昆明随一のショッピング街、南屏街(ナンピンジェ)である。クリスマス・イヴの今夜、日暮れとともに南屏街広場はとてつもない数の群衆で埋め尽くされ、誰彼なしに人工雪のスプレーを吹き付け合う「疯狂(ファンクアン)」と「狼藉(ランジ)」の修羅場と化していた。その多くは貧しさを知らない「新世代」の若者たちである。

この南屏街広場の一角に、昨年中国で最も高級なデパートといわれる北京の「王府井百貨」がオープンした。本家本元には及ばないが、そのガラス張りの高層ビル群(私は「昆明の六本木



【上】昆明の名所「翠湖公園」。【中】昆明の経済成長を象徴する「王府井百貨」。年末を迎えて、通りはイルミネーションで彩られ、ビルの壁面は巨大なスクリーンになっていた。【下】大混雑の金馬碧鶏坊でも人工雪の吹雪が舞っていた。1年最大の祭りとなる「春節」の前夜にはどんな状態になるのだろうか。

ヒルズ」と呼んでいる)の中には、グッチやルイヴィトン、アニエスベーといった高級ブランド店やオートクチュールの店がずらりと並んでいる。いったい1日の売り上げがいくらくらいあるのかは知らないが、高級ブランド品が売れていることは確かだろう。地方都市の昆明にも今やブランド志向の熱波が押し寄せている。

その南屏街から西に少し行ったところに「翠湖(スイフー)公園」がある。雲南師範大学からは東南に15分程の近さなので、毎日の朝夕、湖畔の遊歩道を通学路にしている。周囲4キロほどの小さな湖、というよりは池に沿って遊歩道と並木が奇麗に整えられ、3カ所から池の中程にある島へ歩いて渡ることができる。初めてここを訪れた時、上野の不忍池を思い出した。

この「翠湖公園」、何かはわからないが、内陸にあっても淡水の池にもかわらず海鴨(カモメ)が住み着いていて、昆明市の名物になっている。遊歩道は早朝から日暮れまで、ジョギングをする人、パドミントンをする人、海鴨に餌を与える人、散歩をする人で賑わい、週末ともなると遠隔地からの見物客もやってきて、湖を1周する一方

通行の道路は自家用車で大渋滞となる。車列をよくよく観察してみると、日本のトヨタや本田、鈴木、マツダはもちろんのこと、韓国の現代、欧州のサンタナ、アウディ、ベンツ、BMWに混じってボルシェやフェラーリが留まっている。ここを眺めているだけで中国の高度成長、昆明人の豊かさを実感することができる。

9月のことだが、ある青年実業家と話をする機会があった。約束の夜、彼は翠湖公園のすぐそばにある高級レストランのルームにわれわれを招待してくれた。私ごときには少々気後れを起しそうな、見るからに品の良いモダンな造りの個室だった。そのレストランのオーナーは彼の友人で、彼はいつでもその部屋を使うことができるのだそうだ。経済成長は新たな「階級」を生み出している。

彼の話では、今昆明では銀行がいくらでも融資をしてくれるので、若い人たちがどんどんと事業を興し、年収2000万円、3000万円を稼ぐ人はそこら中にいるそうだ。彼自身は30歳そこそこの若さながら年収は5000万円を越え、アウディ4台とベンツ1台を所有していることを自慢気に語っていた。彼の睡眠時間は1日3、4時間程度、眠るのが惜しいし緊張で眠れないときも

あるのだが、近い将来に日本にも取引関係を広げて会社をもっと大きくしたいと言っていた。話の端々から現在の成功をもたらした「自信」とさらなる豊かさへの「野心」に燃えている様子がうかがわれた。

その傍らで、公務員の兄上が「公務員の収入だけではやって行けない。弟に助けられている」と苦笑していた。数年前に公務員と民間人の収入が逆転したそうで、今や誰もが豊かな生活を求めて、大なり小なり投資をしたり副業を営んでいるという。その話を聞いて、私のマンションの大家さんも公務員だったことを思い出した。

現在、中国では住宅取得促進策として1人3軒まで所得税減税の優遇策が設けられている。ところがこれを不動産投機あるいは副収入源として利用するたかな人が相当いるらしく、お陰で昆明の住宅価格はこの1年で2倍以上に値上がったそうだ。不動産投機の話は昆明に限ったことではないようで、先日新聞を読んでいたらこの住宅取得優遇策が近々「1人1軒」に変更されると記載されていた。

青年実業家氏の話聞きながら、かつての日本のバブル景気を連想した。そのことを彼に投げかけたところ、日本の轍は踏まないと言っていた。

正義門から南屏街へ向かう正義路の右側に正義門ショッピングモールがある。地下1階から3階まで主に若者を対象にしたブティックや小物のお店が並び、4階と屋上はステーキハウスやインド料理、イタリア料理、韓国料理などの飲食店が並んでいる。平日の夕方や週末には竹下通りを思い起こさせる混雑ぶりで、いまやポスト文革世代の2世が大量消費ブームを牽引する台車となっていることをうかがわせる。

このショッピングモールの一角に「Kawana Cafe」というカフェがある。店の雰囲気は気に入って毎週通っているうちにオーナーの呂さんと親しくなり、先日、いろいろな話を聞かせてもらった。彼もまた32歳の若さで、レストランとこのカフェを経営している。

現在、中国の大学では、学生が「起業」を希望すれば、その実現性が認められれば起業資金を大学が融資する制度がある一方で、彼もそれを利用して現在の会社を起したのだそうだ。ところが、実際に会社を起す段階になると、開業許可の申請や会社登録に大変な時間と途方もない忍耐を要するそうで、魚心に水、「コネ」と「心付け」が欠かせないと言いつつ片目をつぶった。就職するにしても会社を起すにしても、父親のバックアップが欠かせないとも言っていた。父親の社会的地位や一族郎党のコネは有力な資産なのである。

『生活新報』という新聞に興味を引く記事が載っていた。現在中国に1億円以上の「身家(シヤンジャ)」つまり個人資産を有する「楽退富豪」が6万人以上いると記載されていた。その多くが40歳、50歳代の投資家で、余暇にはゴルフを楽しみ、年に4回の海外旅行を楽しんでいる。旅行先のベスト2はアメリカと日本だ。一方、国内にニューズ面に高級官僚による汚職事件の裁判結果が報道されていた。3千万元(約4億円)の収賄罪で死刑(執行猶予付き)及び私財没収の判決を受けた広東省政治協商会議主席を筆頭に、省の超高級幹部6名が死刑、4名が無期懲役刑の判決を受けている。汚職と売春は世界共通というが、拝金主義が横行する現代中国では、権力のあるところに汚職は絶えないことだろう。摘発された官僚を「落馬高官」と表現していたのには思わずニタリとした。言い得て妙な四文字である。

「豊かになれるものから豊かになれる」と改革開放が始まり、昆明でさえ毎年来るたびに豊かに発展していることを実感する。翠湖公園では多くの人が幸せな時間を過ごし、南屏街は買い物袋を抱えた人々で賑わっている。だが、その傍らで地面に頭を擦りつけて物乞いをする人々を毎日何人も目にする。その多くが身体に障害をもつ人たちだ。また、農村部、さらにその奥の山間部にはいまだに電気も水道も病院もない、都市の利便さや物質的な豊かさから遥かに取り残された人々がいる。それが中国の現実だ。

※疯狂…常軌を逸した無軌道な行為。狼藉…乱雑に取り散らかすこと。